

Residual short-segment distal inflammation has no significant impact on the major relapse of extensive ulcerative colitis (全大腸炎型潰瘍性大腸炎の寛解期に遠位にのみ残存する炎症は予後に有意な影響を与えない)

Journal: Inflammatory Bowel Diseases 2021 in press

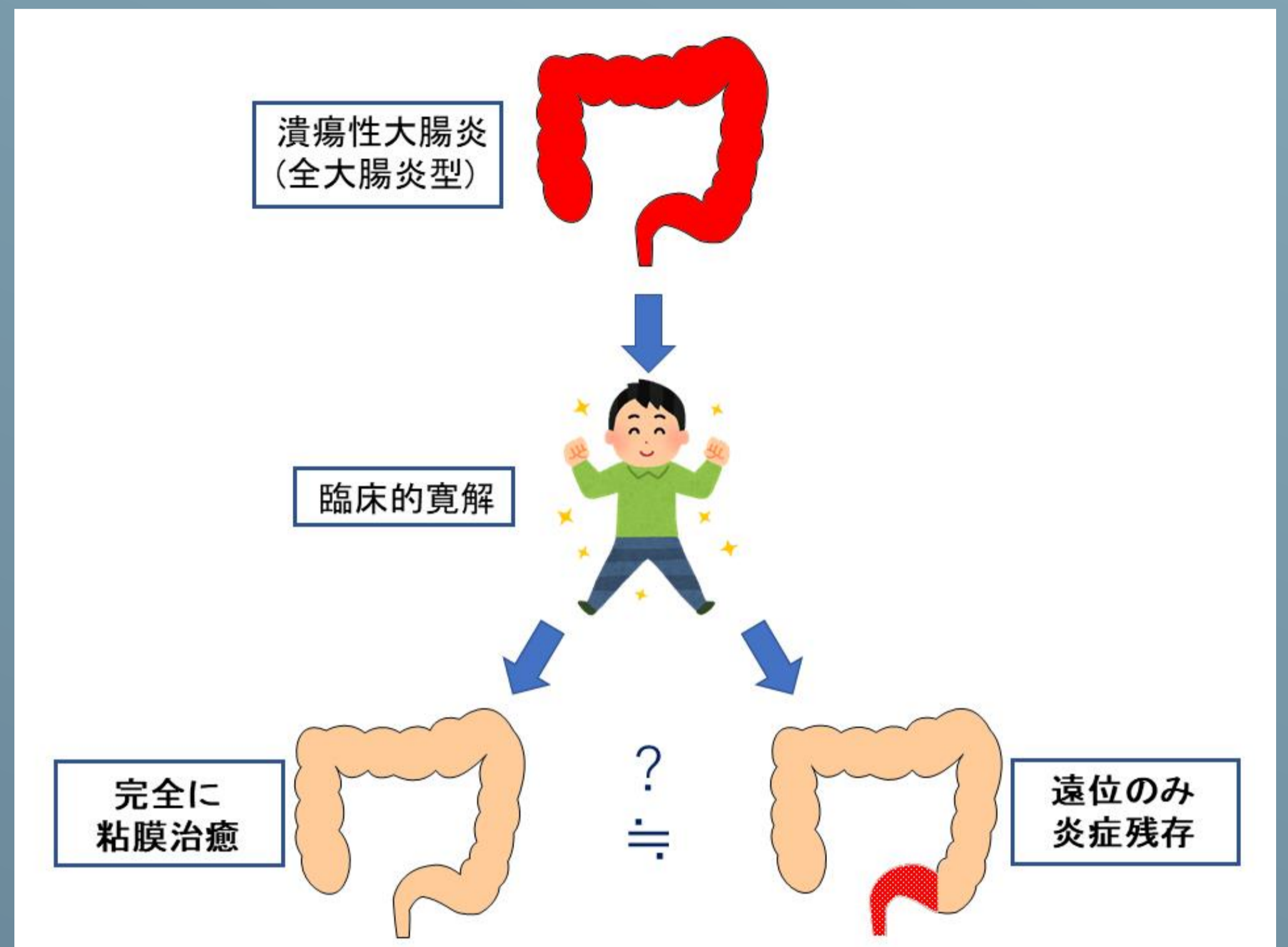
Kunio Asonuma, Taku Kobayashi, Masaru Nakano, Shintaro Sagami, Hiroki Kiyohara, Mao Matsubayashi, Hiromu Morikubo, Yusuke Miyatani, Shinji Okabayashi, Hajime Yamazaki, Yuichiro Kuroki, and Toshifumi Hibi

阿曾沼邦央 (IBDセンター)

【研究の背景】

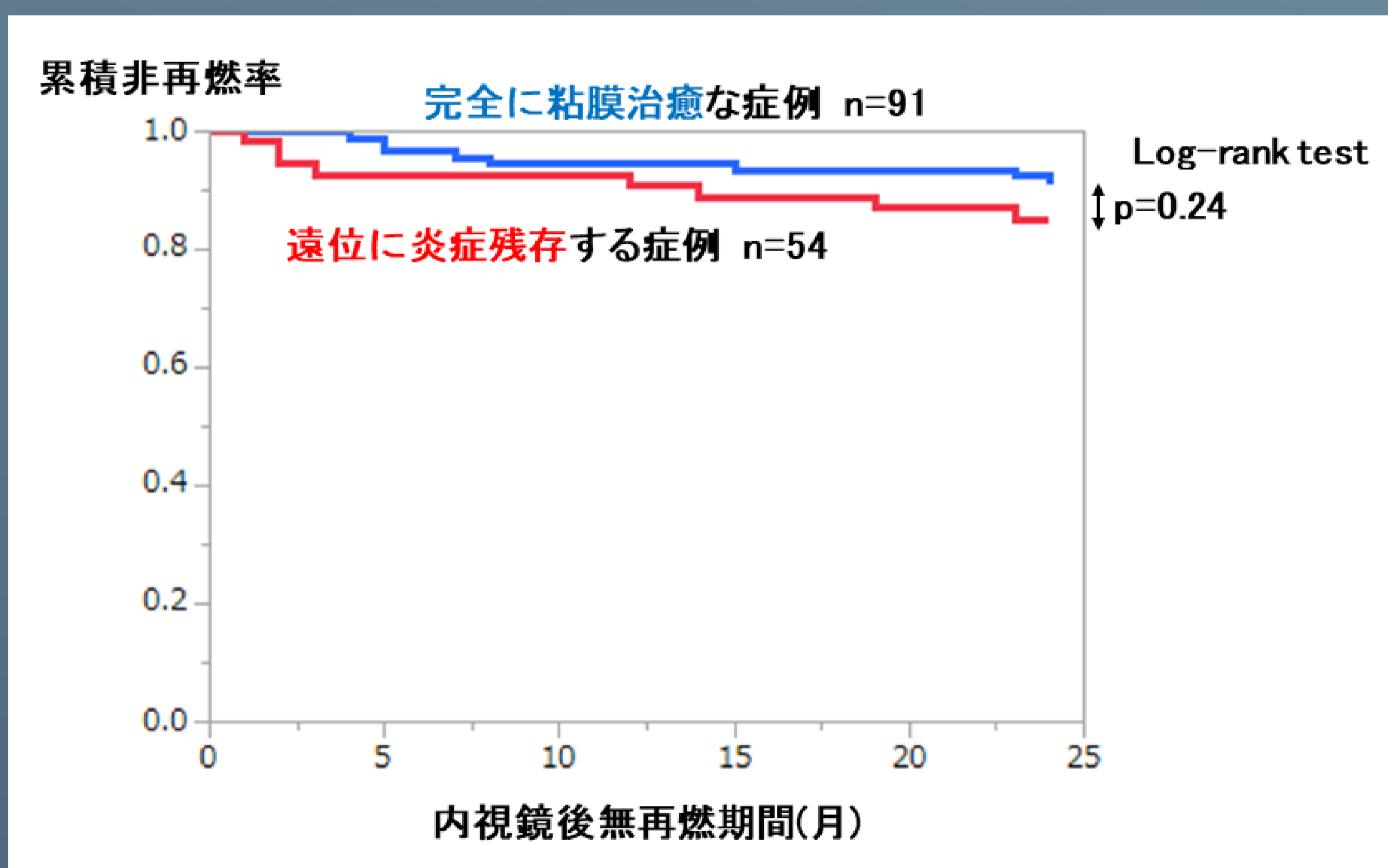
潰瘍性大腸炎の診療において内視鏡的に炎症のない状態(粘膜治癒)が治療目標となっていますが、日常診療において体調は問題ない状態(寛解期)で内視鏡を試みると、「罹患範囲の大部分は粘膜治癒ですが一部にのみ炎症が残存している」場合があります。

その様な場合に完全な粘膜治癒を目指して治療を強化する必要があるかは明らかではありませんでした。



【方法と結果】

・寛解期の潰瘍性大腸炎(全大腸炎型)145人を対象とし、大腸内視鏡検査で完全に粘膜治癒であった症例とS状結腸から直腸のみ(遠位)に炎症が残存していた症例のその後の経過を比較すると、ステロイド投与や入院などの重篤な再燃について差を認めませんでした。



・遠位にのみ炎症が残存する症例では軽微な症状(血便や排便回数)が出ることは増加しましたが、注腸や座薬、5-ASAの調節で、約70%の症例が改善していました。

【結論】

今回の研究の結果、遠位大腸のみ僅かに残っている炎症は重篤な再燃に影響しないため、その部分を改善させるために治療を強化する必要はなく、血便/排便回数の増加に注意しながら現在の効果的な治療を継続する事で問題無いことが示されました。

潰瘍性大腸炎の経過中に頻繁に遭遇する状況に対する指針になりうる結果だと考えていますが、こういった病変が長期的に癌化などにつながらないか等、さらに検討を進める必要があります。

最後に、この研究にご協力いただいた先生方、スタッフの皆様、患者様に深く感謝申し上げます。この研究が多くの患者様のお役に立てれば幸いです。

(文責 阿曾沼邦央)